金子大榮「私の真宗学」の翻刻と解説（二）　翻刻編

村山保史

二　翻刻

1　凡例

・ここには、二〇一二年三月刊行の『真宗総合研究所研究紀要』第二九号に掲載した「金子大榮「私の真宗学」の翻刻と解説（一）　解説編」に続き、「私の真宗学」（『中外日報』一九二八年六月十七日～七月十二日。六月十七日の「原稿に添へて」を含む）の翻刻を収める。あわせて、「私の真宗学」の理解に裨益するものとして「教法と内観――多田鼎氏の批評に対する弁明――」（『仏座』第十三号、一九二七年一月）と「当の金子教授はどんな気持でいるか」（『中外日報』一九二八年六月十五日）の翻刻を収めた。

・送り仮名、清濁、促音の大文字表記、「を」の使用法などは底本どおりとした。

・旧漢字は新漢字に改めた。

・旧仮名の「ゐ」は「い」とし、「ゑ」や、「江」を仮名化した「え」文字が使われている場合は「え」とした。

・踊り字（繰り返し記号）は、同の字点（々）以外のものは現代的な表記に改めた。

・圏点（傍点）は、底本では各種使用されているが、すべて傍線で示した。

・句読点については、（注で引用した文献も含めて）最小限を補い、読点を句点にした場合もある。
・〔　〕内の語句は翻刻者による補足である。
・全体的な解説は解説編でおこなったことから、本編での注解は最小限に止めた。

2　「教法と内観」

一九二七年一月　教法と内観――多田鼎氏の批評に対する弁明――（『仏座』第十三号）

一

多田鼎氏は、氏の『みどりご』誌上に於いて、私の講演速記である『浄土の観念』に対しての批判を発表せられました。氏は真宗の教界に於ける人格者であり、特にこの発表をせらるるまでには、同友の人々と共に『浄土の観念』を攻究せられ[1]、飽くまでも慎重の態度を以つてせられてあるのですから、私は畏れと喜びとを以つて、それを繰返し読んだのであります。

併し悲しいことには、私は氏の批評の前に服従することが出来ませぬ。それは恐らく氏も予知してをられたのでせう。それ故、その文字は敢て私を誘掖し教導するといふ態度ではなく、また私の解答を要求するといふ態度でもなく、言はば最後の言葉として私を教誨しつつ、同時に『みどりご』の読者に対して、私の学の方法が全然間違つていることを宣示せられたものであります。実際また氏も言つてをらるるやうに、氏と私と討議をしたことは一度や二度ではないのでありますから、氏としては私の学の方法は充分に解つては居るが、しかし何うしても容るすことは出来ぬといふことであるに違ひありませぬ。それは誠に止むを得ぬことであります。かくも根本的に違つていると思ふてをらるるところから当然現はるることであることは解つていますが、氏の批判の言葉の中には、私に取りて心外のものも尠くはありませぬ。しかし私はそれを一一弁明することを差控えます。それは却つて事を煩雑にして、問題の中心を逸する恐があるか

らであります。それよりは氏が私に反省を促さるる根本問題を明かにして、私の行くべき道に進まうと思ふのであります。

二

何所に氏が私を教誨せらるる問題の中心があるのでせうか。それは要約すれば次の数語に尽きることであらうと思はれます。「真宗の道は唯だ教法を聴聞することである。行も信も証もみな教によりて与へられる、それは自覚だの自己反省だのといふものに依りて得らるるのではない。内観だの根本主義だのといふところから感知せらるる如来や浄土は、ただ自己の観念界に現はれたものに過ぎぬ。われわれの帰命し願生すべき如来や浄土は、釈尊の観念界に現はれたものである」。これが中心の問題であります。勿論、氏としても自覚や反省を全然無意味のものといはれるのではないし、私もまた如何に教法を尊重するかは、常に明細に私の書いたものを読んで下さるる氏も御承知の筈であります。「併し何といつても方向が間違つている、何所までも教法に信順して行くべきであるのに、その教法をすら内観を以つてこれを領受しやうとするのではないか。」そこに氏の批判の根本があるのであります。

誠にその通りであります。私は教法を尊重する。「真実の教といふは大無量寿経これなり」といふ言葉は、私には強い権威をもつ、それ故に如実にその教を領受したい。しかし如実にその教を領受するといふことは何ういふことであらうか。私に取りては唯だ内観に依りてであります。教法が私を覚醒し、私が内観に於いて信証せられしそれだけが私の教法領受であります。勿論、教法には私の領受を超えてをるものがありませう。しかしそれは私の信ずることも疑ふことも出来ぬもので、私の自覚が明かになり、内観が純粋になつたときに、やがて領受せらるるものであります。それ故、氏にして私のこの態度を承認せられ、且つ私の領受せざるところを進んで領受してをらるるならば、氏の親切なる性格として、必ず私を誘掖し教導せらるるに違ありませぬ。然るに全然方向を誤つているといはれるのは、言ふまでもなく

私のこの態度こそ容るすべからざるものとせらるるのでありませう。

併しこの態度を拒んで教法を領受するとは如何なることであらうか。われわれに教法を領受する能力はない、ただ教法そのものの力で教法は領受せらるる、さういふ言葉だつて私は拒みもしないし、現に私も使ふても居ります。さうすれば一体何ういふ所が違うてをるのでありませうか。それは私が常に内観を語る点にあるのであります。

三

「自分は釈尊の胸に現はれたる浄土を語る、然るに君は君自身の胸に現はれたる浄土を語る」と氏はいはるる。私は敢えてこの言葉を拒まない。私は自分の観念界を語つても、それ故にその観念界は私といふ個人の作り出したものだと思ふことは到底出来ぬのであります。それ故に釈尊の胸に現はれられたる如く、私の観念界に現はれ給ふ如来と浄土とを拝することは、私に取りてこの上なき喜びであります。

古来真宗の学者には、苟くも「自」といふ文字のつくものは如何なる意味であらうとも、それを拒むといふ固執がある。随つて自覚だの自己反省だのいふことは皆自力の迷心であるとする。而して甚だしきに至りては、その自覚の自や、自己反省の自己やは、総べて対象化された個人と同じものであるとしてをるやうであります。随つて内観といへば、わが胸を眺め、主観といへば個別的な何か小さいものと考へてをります。わが畏敬する多田氏は、勿論、そんな風に考へて御出になるのではないに違ありませぬ。自覚といふ文字や、反省といふ言葉が、正しく理解さるるときには、さらに進んでは現実に自覚し反省しつつあるときには、対象化して分別しつつあるやうな個人だの自己だのといふことのないことは、百も御承知のことと思ひます。それには関らず、それを拒まるるのは、たとへ自覚だの反省だの主観だのといふことは何んな意味であらうが、要するに其所から出発したものは、畢竟汝の観念界であつて、仏祖の観念界ではないではないかと言はるるものでありませう。

さうすれば多田氏は何うして、私の自覚の観念界に現はれたものと、釈尊の観念界に現はれたものと異つていると判断をせらるるのでありませうか。氏も亦た釈尊の観念界を内観せられぬ筈であります。氏は自分は唯だ仏祖の観念界を語るといはるる、しかし私は氏の語るところは果して仏祖の観念界であらうかと疑ふことが出来る。何故ならば仏祖の観念界は多田氏に自覚もせられず内観もせられぬものであるからであります。氏は恐らく仏祖の仰せそのままを伝ふるに何の疑があらうといはるるのでありませう。併し仰せそのままといふことは、私にも懐かしい言葉であるが、私には問題的であるのに、氏に取りては無問題的である。そのままが問題となるといふことは、自力の計があるからであるといはるるのでありませうが、そのことがまた氏には無問題的であるのに私には問題的である。それ故、私をしていはしむれば、氏はかかることを問題とする御経験が全くないのであるか、然らずんばそんな問題は既に消滅して、自然無疑の状態に到達せられたに違ひないのでせう。私は氏と逢ふて話す時には、氏を前者に擬して私の衷情を訴へるを常としてをります。併し別れて独り思ふ時には、氏の後者であるべきことを思うて幾度か氏の説を見直さうとしたことでせう。併し悲しい哉、私には何物も与へられぬのであります。

四

私の恐るるところは、私の自覚そのものでなくして、寧しろその自覚が純粋でないことであります。私の業心は鈍真に自覚し反省し行かないで、何時の間にか自覚を考へ、反省を思想してをることであります。私が自からも傷み、他からも警告さるる点は、実にここにあるのであります。多田氏が私に対して批判せらるる点は、自覚そのこと、反省そのことが聞法と方向が反対であるといはるるのですが、私に取りては唯だ私の自覚を考へたり、反省を思想したりすることを警告さるるやうに聞えてなりませぬ。真に自覚し反省するときには、如実の教法はそのまま私に流行し私に体験せらるる、その時こそ私もまた多田氏と同じやうに、自然無疑の心を以つて「唯だ聞法あるのみ」といふことが出来ませ

う。私は現にその境地を確かに感知するものであります。それは多田氏の言はうとせらるるところと一致するか何うかは、本より計り知ることの出来ぬものではありますが、しかし多田氏も亦た必ず微笑んで同感せられねばならぬものであることは明かであります。

まだ言ひ尽さぬものが多いやうでありますが、根機が尽きましたから、これにて擱筆します。申すまでもなく、多田氏の批判に現はれた事柄を列挙すれば、種々のことがあるのであります。私は敢えてその解明を逃避するのではありませぬ。唯だ根本問題さへ領解さるれば、それらは自然に氷解せらるることとなり根本が瞭解されないならば、如何に解明しても徒に煩雑を重ぬるのみと思ふのであります。

私は自分のものに対する批評の弁明を書いたことは、これが始めであります。一方には自分の態度を明かにしたいと共に、一方には多田氏の本領を誤解したくないといふ気分が、頗る難渋を感ぜしめました。それにここに記さうと思ふことは、総べて、常に私が発表しつつあることを繰り返す外ないやうであるので、一層筆が動かぬのであります。それでなほ正当に解明せねばならぬことが思ひつきますれば、さらに筆を改めて書くことにいたしませう。

――昭和二、一、三――

3　「当の金子教授はどんな気持でいるか」

一九二八年六月十五日　当の金子教授はどんな気持でいるか[2]

この度、私の著者が測らずも宗内の物議を生じ、事件拡大、為に一方ならず師友諸賢に御心配をかけましたことは、誠に恐縮に堪へませぬ。しかしそれは私一身のことでなく、真宗学の根本問題に関する事と信じますから、ここに卑見を陳述し、師友諸賢の御瞭解を仰がんと欲ふのであります。

一、[3]私の真宗学研究は、申すまでもなく、真宗の教法を正しく領解して、その宗要たる如来の本願の旨趣を明かにしたいといふことの外にはありませぬ。如来もその本願に依りて顕現したまひ、浄土もその本願に依りて荘厳せられ、衆生もその本願に依りて救済せらるる。その意味を正しく領解することの外に、真宗学の本義はないと思ふてをります。

一、この度、問題となりました二書も（「浄土の観念」、「真宗に於ける如来及び浄土の観念」、いづれも講演の記録が出版されたるもの）、如上の研究精神から、「如来」と「浄土」とに就ての私の領解を述べたものに外ありませぬ。それは真宗の教法に依る、私の如来及び浄土の実在観念に就ての管見であります。それ故、私としてはその説明には、相当に苦心もいたしたのでありますが、御読みになる方にはなほ意を尽して居らぬと思はるる点も定めて多いことでありませう。併し私は、私の心を掬んで下さる方は、この書に於ても私の言はんとするところを瞭解し、彷彿として私の実在観念にも同感せらるるであらうと信じて居りました。

一、然るにその中に、「実在の浄土は信ぜられぬ」[4]といふことを申しました（それが特にこの度の問題となつたのですが）のは、教法の指示する実在観念を、常識の見解に依る実在観から簡ばうと欲ふたからであります。ここに常識の見解に依る実在観といひましたのは、その為に私が長い間悩まされたものであります。常識の見解に依る実在観は到底成立いたしませぬ。さればこそ反対に如来と浄土との実在を無視する、現代の常識的見解も生じたのでありませう。それ故に私は教法に依る実在観念を明かにすると共に、この常識の見解に依る実在観と、非実在観とを除去しやうといたしました。それは一方には常識に依る実在と教法に依る実在とを混融する素朴なる信仰を純化する所以であり、他方には、如来と浄土とを無視する現代の常識を批判して、教法に依る実在観念を宣揚する所以であると思ふたのであります。

一、已上のことは、二書を通読して下さるる方には御瞭解を得ることと存じて居りました。然るにこの常識の見解を批判するといふ私の態度が、この度、侍董寮諸師[5]の御憂慮を被ることとなつたのであります。諸師の御意見では、如上の私の真宗学研究の態度そのものが、指方立相の教に反き、自性唯心に陥りはせぬかと案ぜられたのでありました。併し

私としては、右の二書も前申した意味に於て、指方立相の教意を如実に領解せんとしたものに外ありませぬ。私は指方立相といふことは常識の実在を意味するものでないと思ふものであります。若し常識の如く実在するならば、指方立相といふ言葉も無意味とはならぬでせうか。「方を指し相を立つ」といふことは、実に相を離るる能はざるわれらに対しての教意であればこそ、深く尊重せらるるのであります。またこの教意あればこそ、われらは常識の実在を超えたる「三界の道を勝過せる」浄土を、より高き実在として願生することが出来るのであります。併しかくの如く教法を領解するためには、必然の過程として自覚の論理を辿り、内観の理性に依らねばならなかつた私の研究が、自性唯心的色彩を帯びて来ることは、誠に止むを得ぬことであります、されどまた、それ故に何所までも自性唯心にとどまることの出来ぬことも、私にありては明かなことであります。

一、[6] かやうな点に於ては、私の研究に反対の現はるるであらうことは予期もして居りましたが、同時にまたその反対に激励されて、私の研究を純粋に進むるならば、何時かは私の精神も瞭解さるるであらうことを念願して居りました。私は真宗学に志すこと二十余年、幸に師友諸賢の御指導に依りて、その道を進めつつ今日に至りしこと感謝に堪へませぬ。かくして真実に教法を領受し、自他の救はるる道を開くことが、以て仏祖の恩を報じ、また宗門百年の基礎に対して貢献する所以であると信じて来ました。然るにその志半にして、今日の問題を生じたること、師友諸賢に対して誠に慚愧に堪へぬことであります。併しまたその故にこの問題を解決するの道は私としては更に精進して、私の研究を純にし、私の志を徹底するの外ないと思念せずに居られませぬ。

ここに謹んで卑見を表明し、以つて公正なる御意見を請ふ次第であります。

4　「私の真宗学」

一九二八年六月十七日　教法に対する学の態度——私の真宗学㈠——

真宗の教法に対する私の学の態度は、それを正しく領解したいといふことである。教法は飽くまでも尊重するのであるが、併しそれには解らぬことが甚だ多いので、何うかしてそれを解りたいといふことである。然るに解らぬことを解るやうになりたいといふだけならば、その外に学問といふものがある筈がないから、何人にも承認されることであらう、されどそれが「教法を尊重して」といふ要件を有つが故に、其所に問題が生ずる。その問題が私の真宗学に反省を要求する。一は私と同様に教法を尊重する人から、一は私と同じ様に〔は〕御教法を尊重せぬ人から。

私と同様に教法を尊重する人の中には、それ故に何所までも自分に領解の出来るやうにしようとする私の態度を誤とするものがある。それらの人々の見解では、教法の大部分は、われわれの解る解らぬを超へているものである。それ故にわれわれはそれが自分に諒解出来るか何うかを問はずに、唯だ真宗の教法はかういふものであるといふことを知りさへすればよい。而してそれが信の本となるのである。それを強いて解りたいとするから、自然、己心の見解が加はるやうになるといふのである。私はそれらの人々のいふ通り、私の態度では、己心の見解が加はり易いことを知り且つ恐れている。併しそれは私が陥いり易いのであつて、私の学が陥いるものではない。それ故に私の学の現実は何うあつても、私の学の理想に随て進まんと思ふのである。己心の見解の加はつている所は気附くに随て訂正し行くより外ないのである。

加之、私は解る解らぬを超へて教法はかうであるといふ学の仕方に満足することの出来ぬものである。如何に「解る解らぬを超へて」といふても、既に「教法はかうである」と断定する以上は、その立場に於て「解つている」のである。その限りその人々の「解つている」が、全く私には「解らないことである」といふことも出来るし、またその人々の「教法はかうである」は果してさうであるか何うかを問題とすることも出来る。兎もすればそれらの人々は、己心の見解を加へながら、それを意識しないのではないかとさへ思うことが出来る。こんな問題を有つところに、私の学の悩みがあるのであらう。私は私と同じく教法を尊重する人から、この悩を洞察して貰ひたい。

私と同じやうには教法を尊重せぬ人々は、教法を一筋縄で領解しやうとする私の態度が無理であるといはうとする。何んな書物でもそれの出来た時代を考慮に入れぬでは解釈されない。経典といへども同様である。真宗の教法といへども、その大部分は、昔の世界観や、古人の想像から成つている。われらはそれらの時代的のものは、悉く除去りて、永遠なるものだけを摂取すればよいではないかといふのである。私はこれらの人々の研究に敬意を払ふことを惜しむものでない。併し私はさういふ態度の研究だけで満足することが出来ぬ。たとへ昔の世界観や物語やが取入れられていても、それが教法として現はれたる限り、何か深い意味がなくてはならぬと思ふ。それは唯だ現在の私に解らぬだけである。

それ故、私の真宗学の結果に於て、一見、真宗の教法に違するやうなことがあるとしても、それは私が教法に違するのではなくて唯だ私の学がまだ教法の全体の領解に達しないからである。

原稿に添へて

拝啓、唯今、御紙を披き、先づ村上博士の論文を見ました。大体が私の説を知らぬといつて居りながら、批評せらるるのですから無理もありませぬが、「浄土の観念」は博士の言はるるような意味で浄土を否定したものでもなく、また聖浄二門の別といふことには、特に力を注いだものであります。何うも博士の議論は、「大体、今時の若いものだから、こんな風に考へているのだらう」といふことを頭に置いて、それを批評してをらるるようです。後進も先進を知らぬ点が多いでありませうが、先進が後進を知らぬ点も余りといへば甚だしいやうです。而して宗門の問題は実にこの先進後進の相互不諒解が根本を為していると思ひます。私の進退に就てもいろいろ批判さるべきものがあるでせう。併しこの際私は多く弁明しませぬ。私の思想に就ては、いろいろの批判がこれから現はるるでせう。それに就ては、自から弁明の必要を認むるものに限り弁明しませう。本当に懇切なる教示が出ますれば、中心より感謝すべき用意もいたしてをります。今まで安心や学解の問題が御紙の上に幾度も出ましたが、それらの問答は何を意味するかに就ても、私には一つ感

想があります。「諍論の起るところにはもろもろの煩悩おこる」ことは、私自から経験してをりますから、出来るだけは避けて、純一に自分の学を徹底するより外ないと思うています。併し止むを得ざる論議は、如何に事を好まぬでもせねばならぬに違ひありませぬ。それで今、「私の真宗学」三篇を送りました。若し村上博士や多田鼎氏やのものに弁明の必要が生じますれば、それは「私の真宗学」四已下として書きませう。（金子大榮）

一九二八年六月十九日　真宗学の二途――私の真宗学㈡――

それが自分に解る解らぬに関らず、真宗の教法はかうであるといふことを知ることを以て真宗学であるとする人の立場からは、真宗学はただ先進より後進に伝ふるといふ一途あるのみである。其所には後進を待ちて明かになるといふことは余りに予想せられない。併し何所までも自分に解つて行きたいといふ学問の態度には、常に先進の教を聞くと共に、深く後進に期待さるものがある。その後者の途は果して真宗学には許るされぬものであらうか。

問題は先進から後進に伝へらるべきものは、学問の精神であるか、学問の成績であるかである。若し伝へらるべきものは、学問の成績であるならば、ある問に対する先進の答が自分を満足せしめないでも、後進は新たなる答を作つてはならぬであらう。あるひは更に新たなる問を起すことも許されぬこととなる。併し伝へらるべきものが学問の精神であるならば、先進の答が充分でない時には、新たなる答を作るべく、更に新たなる問も起して差支ないであらう。それこそは後進が先進の志を遂ぐる所以であるからである。

私は数年前、大谷大学の教壇に立つことの不安を感じたことがある。それは自分のやうな領解の貧しいものが、この教壇に立つ資格があるかを思ひ悩んだのである。その時に、その悩みより私を救ふたものは、学に対する私の態度である。自分は唯だ先進の学問精神を承けて、誠実なる後進の現はるることを期待するのみである。私の学問精神に幸に見るべきものがあるならば、その精神を助けて、私の学問の成績を訂正し、超越する後進の友が現はるるであらう。教壇

に立つことは、かかる後進の友を求むることであつて、それに対すれば学問の成績を伝ふることは、それ程重要なことではない。「自分はこれまでやつたがもう進むことが出来ない。諸君よろしくこの後の道を開いて貰ひたい」といふことが、学問の道であることを知つて、私は教壇に立ち直ることが出来た。

併しこの態度は、一般の学問に許るされるものであつても、真宗学には許るされぬものか何うかは、大方の示教を俟つの外はない。私は真宗の教法は無尽の法蔵なるが故に、如何なる問の手に対しても、何ものかが与へらるるものであると信じてをる。問に重ぬるに問を以てすることに依りて、教法は益々その功徳を現はすものであると信じている。それ故に、未開の野を拓くが如き学問も、真宗の教意に反かざるのみかは、却つて真実に教意の限りなき意味を領知せしむるに違ひないことを思ふものである。

一九二八年六月二〇日　宗門大学の使命――私の真宗学㈢――

私の領解するところでは、親鸞はその代表する一切衆生のものであり、日本人のものであつて、特に真宗諸派のものではない。随て真宗の教法は、苟も宗教的要求あるものには、何人にも領解し得らるるものであつて特に真宗教団に属する人々にのみ理解し得らるるやうなものでないと思ふ。それは余りに明瞭なる事と知る人には、この私の言葉は皮肉にも思はるるであらう。併し私は極めて真面目である。この事実は、兎もすれば宗門の人々に忘れられているのみならず、社会もまた看過してをるのである。

それ故に宗門大学にありては何よりも真宗の教法が一切衆生に公開されたものであることを学問に依りて明かにせねばならぬ。苟も宗教的要求の上に立つ理性を有つものならば、何人も領解し得べき普遍的意義を顕彰することを要する。かかる意味を顕彰することが出来るならば、其時始めて宗門大学は社会的価値を有つこととなるであらう。国家に対して、無くてはならぬものとなるのである。それまでは有つて善いものであつても、無くてはならぬものではない。

然るにかく宗門大学の意味を確立することは、同時に宗門そのものをして、国家社会に無くてはならぬものとする基礎を与へることである。宗門成立の基礎は、常にそれ自体をして一日も国家社会に欠くべからざるものたらしむることである。単に有つて善い程度のものでは危ない。それは兎もすれば無くも善いものと混一され、遂には無い方が善いものともせらるるからである。宗門が無くてならぬものとなることは、宗門が宗門自からを私せざることである。宗門が宗門自からを私せざる基礎は、宗門が親鸞を私せざることになる。親鸞が公有のものなることを大学が明かにし、宗門がこれを原理として種々の施設をする。其所に宗門存在の意義が成立するのである。

宗門大学がかかる使命を果すとき、それは真に宗門に貢献するのである。即ち宗門大学の使命は、見える宗門の為にあらずして、見えぬ宗門のためである。現前の宗門の功利的欲求に応ずべきものにあらずして、未来の宗門の理想的欲求に応ずべきものである。所謂、既成的な宗門の為にあらずして、未成的なる宗門の為になるべきものである。而してそれこそは、見える現前の宗門をして、生気あらしめ、未来あらしむるのである。

ここに宗門大学の真宗学が特に顧慮せられねばならぬものがある。それは学の方法と態度とに於てであつて、教義の確定や宣伝の方法に於てではない。其所には所謂、安心や学解やを超へたる根本問題がある。其所には真に宗門を憂ふる者ならば、総べての同異を超越して、協同研究せねばならぬものがあるのである。

一九二八年六月二十三日　己心の浄土と西方の浄土　村上博士に答ふ（私の真宗学㈣）

私は真宗の教相を無視するものでなく、また真宗の教相を無視して真宗学は成立するとも思ふていない。然るに村上博士は私が殆んど真宗の教相を知らざるものの如く予断して議論を進められた。それは言ふまでもなく、私の著作も見ず、その「所説を明かにせぬ」で論ぜらるるところから来た間違であつて、その態度は博士の為に惜しむべきことではあるが、併しまた私の著作も読まずに、かく博士をして予断せしめたものは何であるかを思ふとき、私は言ひ尽せぬ感

慨に打たるるものである。而してその感慨の中には、何故に先進がかくまで後進を信ぜないのであるかといふことも含まれていることを、博士から推察して頂きたい。

真宗の教相を無視しては、真宗学は成立しない。それは余に明瞭のことである。されば問題は何所にあるか、教相を領解する仕方にあるのである。「何を」学ぶかに就ては問題がない、「云何に」学ぶかに問題があるのである。教相を識知するだけが真宗学であるか、云何に教相を学解するかも真宗学として認容せらるべきかである。私は真宗学に於ける対象（教相）と方法（学解）に、内面的な関係を認むるものである。併し宗門の学頭諸師の中には、唯だ教相を識知するだけを真宗学とせらるる方もあるやうである。博士は果して何れを取らるるのであらうか。

博士は雲照和尚が己心の浄土と西方の浄土と、その一方の解る人でなくては、他方が解るものでないといはれたことを推称してをらるる。されば博士もこの説に同意のことであらう。若し然らば「云何に教相を学ぶか」を真宗学として認容せられたのである。慧然講師[7]の「顕深義記」には、自力他力の別を、縁起法の全有力全無力の説で解釈し、わが斎藤教授[8]は常にこれを唱道してをらるる。自性唯心が西方願生に反かざるのみならず、実に相成するものであることも、古き講者に依りて説かれたことであるが、今また博士に依りてこれを承認せられた。私はそれらの説に満足するものではないが、またそれらの説に反くものでない。私の真宗学は寧ろそれらの説を徹底せんとするものであるといつてよい。それ故にそれらの説が、わが宗門の学頭諸師に認容さるるものならば、私の所説は諸師の説に反くものではない。

併し私はかくいふことに依りて問題を寛和せんと欲ふのではない。寧ろ問題はもつと深刻のところにあることを明かにしたいのである。私には己心の浄土と西方の浄土とは矛盾しないといふ、その人の立場が問題なのである。単に両者を並べて互に矛盾しないと会通するだけならば、私に取りては何の意味もなきことである。それは依然何を学んでいるかであつて、云何に学んでいるかではない。私の志す真宗学では、己心の罪障に眼覚めることに依りて西方に願生し、西方に願生することに依つて己心の罪障を知る、その経験を自覚の論理によりて概念して行かうといふのである。これ

その学の態度が自性唯心的色彩を加ふる所以であり、しかもその学の内容は却て自性唯心から解放さるる所以である。

以上の説明に依りて、多少でも私の微志が博士に受容せらるるならば、私は博士から私の著作を読んだ上で、改めて忌憚なき批判をして頂きたい。その時には、それは外部から私を威圧せらるるやうなものではなくて、真に内部から私を感激せしめるものであらうことを、心密かに期待するものである。

一九二八年七月一日　内観に依る方法(上)――私の真宗学(五)――

已下三つの論文は、総て多田鼎氏の、「浄土の観念に対する観察」[9]に答ふるものである。

真宗の教義を明かにして、これに信順して行かうといふ従来の学の態度に反して、わが生活を内観して其所に開け来るものの教証を得ようとする私の真宗学の方法は、多くの同学者を得ると共に、また常に少なからぬ反対者に遭遇している。「浄土の観念」もその例には漏れなかつた。私は多くの求道者がこの講述に依りて真宗の聖教に親しむやうになつたことを知つている。然るに今や数年を経て、特に専門の真宗学者に依りて、四方より反対せらるることとなつた。しかも今日までの私の経験に依れば、私の反対者の難詰に対しては、(胸襟を披いての談合は別として)多くの場合真に諒解を得たことがない。現に道縁深き多田氏に対しても、この悲しき経験を続けて来た。それ故今多田氏の論文に対しても、答へんとする言葉は胸一杯でありながら、私は徒らに口籠るを感ぜざるを得ぬのである。

これに依りて私は暫らく私の立場を弁明することを休めて、従来の真宗学者の説を傾聴して見よう。私は少年時代より教示されつつ来りしことを想念するのである。それは唯だ善知識の仰せの本に、如来の本願を信楽するのみである。多田氏の語法に依れば、教に於てさしつけられたる名号を領受するのみである。併しそれはさういふ風に説き聞かされただけでは、私は何等の感銘をも得ることが出来ず、却て徒にその「善知識」とは、「仰せ」とは、「如来」とは、「名号」とはと、それらの意味を聞かうとするのみである。この私の心理は如何やうに批判さるかは知らぬが、かかる問を起す

べき理性を与へられている私に取りては何うすることも出来ぬものである。

併し私の理性は最早、全く真宗の教法に信順することが出来なくなつたのではない。それどころか真宗の聖教は、これを読みこれを聞く毎に、ますます深き感銘を私に与へる。この感銘は聖教の何所より来るのであらうか。思ふに従来の真宗学者も皆なこの感銘を経験したに相違がない。而してそれが唯だ「時」と「人」とを異にする為に、私に伝達されないのみであらう。併し私はも一つ其所に研究の方法に依るといふ理由もあるのでないかと思ふ。従来の真宗学は専ら真宗の教義を明かにする方法を取つた。これに対して常に教法から感銘を受くるやうな方法がないであらうか。或は真宗の教義を明かにするのは、既にその教法に感銘しているからであるとも言はるるであらう。併し私にありてはさうではない。私には教法に感銘することなくとも、真宗の教義を解学することが出来るやうに思はれる。それ故に私は真宗の教法に感銘するとき、その感銘する所以の理を教法に求むると同時に自己に求めねばならぬ。而してその自己に求むる道こそ、常に教法から深き感銘を得る方法である。ここに私の内観的方法が成立するのである。

一九二八年七月三日　内観に依る方法(下)――私の真宗学(五)――

それ故に私の方法では、教法がわれわれに感銘を与へるのは元来、教法はわれわれの深い要求に応ずるからであるといふことを前提している。勿論、われわれの要求といふ限り、現はれたままでは不純なものもあり、随て厳粛に反省批判されねばならぬものもあるに違ひない。併し如来の本願も先づ「衆生の意の如く」に随ひつつ、終に「如来の意の如く」ならしむるところにその大悲があるのであるから、われらは自ら自己の欲求を機縁とせずして、何うして如来の大悲を知ることが出来よう。勿論、われらの要求がそのまま如来の本願でないかぎり、如来の本願はわれらの要求を超越している。併しまたわれらの要求も、それが内観反省される限り如来の本願に連続している。それ故に私は、私の内面的生活の内観反省の限界に於て、常に真宗の教法の甚深なる響を感ずる。この意味に於て私にありては、内観反省の方

法こそ、真に真宗の教法をそのまま聞受せしむるものである。

然るに多田氏の私に対する非難は、教主世尊のみことに信順せず、唯信仏語の教に反くといふ一点に集注されている。私はこれに対して何と答へて善いか知らない。多田氏にして真にその語らるる如く、私の発表を常に注意して居らるるならば、私が如何に教主世尊のみことに信順し、唯だ仏語を信じているかを知つて居らるる筈である。ただ私にありては、教主世尊のみことに信順し、ただ仏語を信ずるの道を学びつつあるが故に、その事を多く語らないのみである。また私は多田氏の所謂教法に対する科学的方法を拒むものではない。ただ私はその方法の研究は、既に従来の真宗学者に依りて殆ど完成に近いまで進められてあると思うているのである。それ故にその研究に就ては、先輩に深き敬意を払ふて、私はその講録に今も親しんでいる。多少の修正は施しても、私は先輩の研究し尽せるもの已上に、われらの開拓せねばならぬものを認めない。それ故に私は唯だ如何にして真宗の教法をわが内生活となし、生命となし、血となし肉となし、教となすかを学ぶことに専注するのである。この意味に於て私の真宗学は、実に求道者を代表して教法を聞かんとするものである。

一九二八年七月四日　反対の立場(上)――私の真宗学(六)――

多田氏の十回[10]に亘る私の「浄土の観念」に対しての批判は、精細なる検討と周到なる追求に依りて、完膚なきまでに私の立場の誤であることを説かれてある。私は息づまるやうな気分を以てこれを読んだ。併し読み終りて更に仔細にその批判を観察すれば、不思議にも多田氏は「浄土の観念」に於ける私の学説の大部分を採用して居らるる。「但しそれは汝（金子）の言ひ得べきものでなく、唯だ釈尊の言葉として」といふ条件をつけて。

この事実は諸所に見出すことが出来るのであるが、最も明かに現はれているのは第九節[11]の、「ここで私共に明かになることは、金子氏のいはるる如く、阿弥陀仏の浄土は観念界の浄土である。けれども其れは金子氏の説かるる如く、私共

の観念界ではなくて、釈尊の観念界である――私共の観念界は、金子氏の「観念」の定義に従へば、この見える濁悪苦悩の本源たる悲しき宿業の国であらねばならぬ。（ここでは多田氏が「観念」の語を如何に理解しておらるるかにやや不安はあるが、今はそれを論ぜずに置く）即ち釈尊及び釈尊の教団の本国――私共の肉眼で見ることのできぬ久遠実成の真実の「法」の国――之が阿弥陀仏の安養浄土である。「華厳経」の蓮華蔵世界の名が、其の儘、阿弥陀経の浄土の名とせらるるのは此故である」といふ言葉である。この言葉の後半は、私の「浄土の観念」の撮要とも見らるるのである。

されば多田氏では私の言ふことは、私共の観念としては成立せぬが、釈尊の観念としては成立すとせらるるのである。ここには釈尊と吾等との厳別思想がある。釈尊は仏であり、吾等は凡夫であるといふ思想が前提となつている。随て吾等の内観と釈尊の仏智とは、全く種類を異にしているのである。――勿論私ではさうは思うていない。私が自覚するのでなく、自覚に於て私が見出さるるのであるから釈尊の仏智と私の自覚とは、本質的に別なものとは思はれぬ。仏智とは、その名の如く自覚の智慧であるかぎり、私の自覚と釈尊の仏智とは同じものである。唯だその程度に於て非常の差があるのであらう。釈尊の仏智は円であれば、私の自覚は弧に過ぎぬ。しかもかく程度を異にして本質を同ふするところに、釈尊の説法が深い感動を私に与ふ所以があるのである。随て釈尊の観念界と私の観念界とを区別せねばならぬ理由を認めることは出来ぬ。

一九二八年七月五日　反対の立場(下)――私の真宗学(六)――

併し多田氏では釈尊と私共とは、本質的に違ふものである。然らば多田氏は釈尊と私共との何れの立場にありて、真宗の教法を見らるるのであらうか。勿論多田氏も亦た「私共」に属する限り、私共の立場に居らるるものであらう。されば多田氏は何うして私共の立場にありながら釈尊の観念界を語ることが出来られるのであらうか。それは私共には不可能のことを、多田氏が敢てせらるるやうである。恐らく多田氏のこれに対しての答は、「それは教法を聞思して」とい

ふことであらう。されば教法を聞思し終る時には、釈尊の観念界はそのまま私共の観念界となるのであろうか。

これに対する多田氏の答を、私は全く推断することが出来ない。回向といふはその名号に依りて如来の徳の全分を私共に与へ給ふことであるといふ多田氏の思想に従へば、教法聞思に於て、釈尊の観念界はそのまま私共の観念界とならねばならぬ。併し多田氏は一つの論文であつても、一つの講演であつても、教法聞思の義を略することを許るさない。その事は常に私の発表を注意せらるる多田氏が、私の「宗教的理性」に於ける教法に就ての二三の論文[12]、「親鸞教の研究」に於ける「教法の本質」（「見真第二号」）、「仏座」第五号の「教法論」等に何等の考慮を加へずに、多くの教法内観の私の言葉をのみ批判してをらるるにても明かである。されば多田氏にありては、臨終の一念に至るまでは、浄土は唯だ釈尊の観念界とせらるるやうにも思はれる。併しそれでは何うして多田氏が釈尊の観念界を知らるるのであるかといふ問題へと立ち帰る。

私には多田氏は浄土は釈尊の観念界であると観念してをらるるやうに思はるる。若しさうでないならば、それは私には恐ろしいことであるが、多田氏は「浄土は釈尊の観念界で私共の観念界でない」と言ふ時に、私共の立場にあるのではなくて、釈尊の立場に居らるるのではないかと思ふ。それに就て思ひ合はさるるは、第二節[13]の「一面には（金子）氏のために、一面には宗門自体の統制と其の神聖なる教化の使命のために、厳正なる批判を加ふることに急がねばならぬ」といふ、いと壮重なる言葉である。この言葉は、私をして多田氏の真宗学は、正しく善知識を代表して真宗の教法を説き明かさうとするものであることを思はしむる。それは私にありては余に恐ろしさに言ひよどむのであるか[14]、多田氏にありては当然すぎる程当然のことであるかも知れない。若し然らば私の真宗学とは、何といふ明瞭な反対な立場であらう。

一九二八年七月六日　伝承と已証(上)――私の真宗学(七)――

私の見るところでは、たとへ如何に従来の真宗学者が私の真宗学を拒否しても、私の真宗学には従来の真宗学と一味の相通ずるものがある。併し多田氏の真宗学こそは、全く私の真宗学と反対のものである。随て多田氏の真宗学は、従来の真宗学と必ずしも同一なものではない。一味相通ずるところがあつても多田氏独特のものも尠くはないのである。

その事の最も明瞭なるは、氏の「只今の大無量寿経」説である。「さらば此の観念は如何にして私共に与へられたか。唯真実教による、只今説き示さるる「大経」及び列祖の其の解釈による。私は茲に特に「只今」といふ。即ち只今私共に教へられ、只今私共を喚びたまふ。仏祖の真実教是が私共に本仏の浄土を開顕したまふのである」。然るに「この真実教たる「大経」が、数千年間に亘つて、如何にして又如何やうに伝へられて来たかは経典史の一課として大切なことであらう。けれども私共は何千年前かの「大経」によつて救はれるのではない。今日の「大経」によつて救はるる。又之が三千年前の実語者たる釈尊によつて語られたものであるからとて、之をば真実教と信ずるのではない」といつてをらるるから、従来の真宗学者の説とは異つている。併しそれはまた私の立場の、内観に於て心証さるる「永遠の大経」とも異るやうである。私は敢て「やうである」といつたのは、それは本当に解らぬからである。教それ自体の真実といふことを、釈尊その人已上に見てをらるる点に於て、多田氏の「只今の大経」は、私の「永遠の大経」と一味通ずるものがある。併し「私共は釈尊を斥けて、外に久遠実成の本仏をたづねてはならぬ」といふ説からは、また釈尊の説なるが故に、真実教なる所以もなくてはならぬであらう。さうすればその場合には、「只今の大経」とは如何なることとなるであらうか。

思ふに氏の伝承と已証の概念に依りて推断することを許るさるれば、大経それ自体の真実教なる所以を知るは已証であり、この大経の説が列祖に依りて言ひ次ぎ語り次がるることを伝承といはるるのであらう。随て伝承的意義に於ては、「只今の大経」とは、列祖の釈文に現はるる本願の言葉である。一層適切に云へば、教法が龍樹の口より現はるる時、それは龍樹の時の「只今の大経」であり、乃至、親鸞の口より現はるる時、それは親鸞の時の「只今の大経」である。

随て多田氏の口より現はるる時には、「この多田に取りて只今の大経である」といはるるのであらう。

一九二八年七月七日　伝承と己証(下)――私の真宗学(七)――

併し私の伝承と己証の概念は少しく異つている。私は伝承と己証とを、教法の領受顕開に於て見るものである。教法を領受してその精神を顕開するところに、伝承もあり己証もある。己証の顕開なしには伝承の領受がない。故に顕開の相に於ては、列祖の上にも教相の異が現はれても、領受の心に於ては、永遠常住なるものが輝いている。而してかく顕開といふことの生ずるのは、教法に対して「時」と「人」とに依り新たなる「問」がかけられるからである。故に末法濁乱の世となりて、ますます深刻なる問がかけられるに随て、教法はいよいよその真実性を現はすのである。其所に「永遠なる大経」が感ぜられるのであるが、たとへそれは「今現に」聞くものであつても、われらはそれを「三千年前の実語者たる釈尊によつて語られたる者」とすることに、深い意味を認むるものである。

これに反して多田氏の「只今の大経」はかかる観念的のものではなくて、もつと現実的のものである。随て「只今の大経」と共に、「只今の釈尊」が求められねばならぬ。然るに多田氏はこれに就て敢て一言も費やしてない。併し多田氏の立場からは、龍樹は第二の釈尊であり、乃至源空はその時代の「只今の釈尊」であることを拒まれぬであらう。されば現代只今の「只今の釈尊」は誰れであらうか。多田氏自身は何う意識せらるるとしても、私が多田氏の教を聞く時には、多田氏を以て「只今の釈尊」と信ぜねば、尠くとも多田氏と同じ信念を獲得することが出来ないのではなからうか。

この帰結は多田氏に取りて案外なもの（私の不瞭解から出た）であるかそれとも会心のものであるかは私は知らない。私は今までの論究から次のやうに断定する。「私の真宗学は大衆の内面的要求を代表して教法を領解しようとするものであり、多田氏の真宗学は、善知識を代表して教法を説き現はさうとするものである」と。而してこの断定から再び多田氏の出発点なる「一面には氏のために、一面には宗門自体の統制と其の神聖なる教化の使命のために、厳正なる批判を

加ふることに急がねばならぬ」を想起する。この言葉は何うしても私の口からは現はし得ないものである。私には人のためにその人の思想を批判するといふ心が起らない。起つてもそれを否定して行く。それ故に私にはその人の思想を論議しても、それが自分にうけ容れられるか何うかを明かにせんがためである。随て私には相互批判はなく協同研究が願はしきのみである。「神聖なる教化の使命」は私には感ぜられぬ。唯だ「如何にして自他が救はれんか」を思ふのみである。かくして多田氏と私とは、教法に対して根本的に感情の相違があるやうである。そのいづれが果して「真宗的」であるかは、判断する人の判断に任せやう。私はただ私の真宗学の立場を明かにして、それが単なる私の真宗学に終らずに、その普遍的意味が認めらるるやうになるまで、専念修学せんと欲ふのみである。（完）

附[15]言、私が前に多田氏に私の学問の態度を批判せらるることを拒んだ理由、私の講演の言葉使ひに就ての多田氏の道徳的訓誡、多田氏が私の言葉を誤解してをらるると思はるる二三の点、未だ纏つた形にならぬ批判等に就ては、総べて弁明することを差控へた。それは益のないことと思うたからである。尚ほ成るべく簡潔と思うた為に、氏に対して礼を欠いたやうな点があつたかも知れぬが、その点は御寛容を願ひたい。私は自分の感情と異るとはいへ、特に私のために「厳正なる批判」をと思ひ立たれた友情に深く敬意をささげんと欲ふものである。

一九二八年七月一一日　二三の補遺(上)――私の真宗学(附)――

一、「親鸞」と「聖人」

聖人は敬語であるが、親鸞は呼び捨てではない。宗祖と末弟、善知識と教徒といふ関係意識に於ては聖人といふべきであらう。併しその人の言葉が直接に吾等の宗教的心境を現はしている時、又はその人の思想を学問の対象とする時には、唯だその人の名を呼ぶ方が親しい。この意味に於て親鸞といふ方が聖人といふよりは、私にはしつくりする。親鸞

と呼び得ることに依りて、深く聖人の恩徳を感ぜしめらるるのである。

若し私が人から、「人」関係で呼ばるるならば、金子君とか大榮君とかいつて欲しい。併し「法」関係でならば金子氏とか大榮氏とかと呼ばれた方が善い。さらに死後ある時代を経て、最早、金子君とも大榮君とも言ふものが無くなつても、金子と呼び大榮と呼ばるるやうなことがありとせば、それは私に取りて何といふ名誉なことであらう。それは今のところ望みもせず望めさうもない事である。

時には併し親鸞も親鸞聖人も具略の差に過ぎぬことがある。釈迦世に出興してといひ、源信ひろく一代教を開いてといひ、源空三五のよはいにてといつても、それ等の聖者達を呼び捨てにしたといふことにはならぬであらう。

二、観念

私の批評家達は、多く「観念」の語を心理学的意味に解しているやうである。観念の浄土といへば、直ぐ主観的であるとか、唯心己身であるとか、或は凡夫の意識内容であるとか、と評し去ることも、其所から来るのである。

併し私では言ふまでもなく、「観念」はイデーで哲学的の意味である。それは理性の対象となる純粋客観的のものである。常に個人主観の影像をうち払ふことに於て、真実在の意味を有つ。故に私が観念の浄土を語る時に既に所謂唯心己身を超へているのである。

これに依りて私のいふ「観念の浄土」と「実在の浄土」とは、意味の違ひであること、及びそれ故に、「実在の浄土」といつても、畢竟、「観念の浄土」なるが故に主観的であるといふ批評の間違ひであることが知らるるであらう。

一九二八年七月十二日　二三の補遺(下)――私の真宗学(附)――

三、宗教的なもの

宗教的の欲求、経験、感情、生活等は、真宗学者であるからとて、必ずしも一般人より豊かなものであると限つてい

ない。時には却て絶無であるのでないかとさへ思はるる程貧弱なことがある。私もその貧弱なるものの一人である。併し私は如何に貧弱であつても、この要求、経験、感情等なしには、真宗の教法は領解し得ざるものであることを知つている。それ故にこの要求、感情等をうち出して、それを反省し、それを批判することに依りて、甚深なる教法の一端に触れようとするのである。そして、その一端に触れることが、やがて全体に感動される所以となる。

この立場から「罪障の内観に於て合掌念仏の心を生じ、その念仏の心に於て、顕現せらるる如来を仰ぐ」といふやうなことを語る。私よりも一層深い宗教的な要求、経験等を有する人々は、直ちに同信同証せらるる。然るに多くの真宗学者と名告る人々は、それは内観哲学であるとか、自力的であるとか、凡夫の妄想に過ぎぬとか、面倒な論理だとか批評せらるる。私はこれに対して何と答へて善いか解らない。私に取りては唯だ一つしかない教法領解の道を、あらゆる空しき言葉に依つて威圧せんとせらるるのである。

私はそれらの批評家達に痛烈なる警告を与ふる程、強い性格を有つてをらぬ。それ故にかかる批評をうくる度毎に、その批評に対しては出来るだけ緘黙を守りて、遍に自分の道を豊富にしたいとのみ願ふのである。

四、凡愚

真宗学者の多くは、真宗の教法は凡愚に対してのものであるから、真宗学も凡愚に解るやうなものでなければならぬと予定している。そんな点から私はしばしば、「そんな面倒なことは、君には解るか知らぬが、一般凡愚に解るものと思ふか」といふ非難を被るのである。

併し私では自分に解らないことは、如何なる人にも解らせることが出来ないから、ただ自分の解るやうにのみ真宗を学ぶ。それ故に、その学問が所謂凡愚に解らぬやうな結果になつたところで仕方がない。併しそれに依りて真宗の教法は凡愚のためであるといふことを否定しようとは思はぬ。何故なれば、私自身は明らかに自分を凡愚であると意識しているから。

所詮は、凡愚を外に見るか内に見るかである。その見方の如何に依りて、凡愚に解るであらうと思ふている説は、意外にも凡愚に解らず、凡愚に解らぬと思はるる説が、意外にも凡愚に解つて行くのである。

五、安心と学解

安心には超個人的の根拠があるが、それ自体は個人的のものである。それ故に安心を論ずるものは、それで安心が出来るか何うかを思ふて、而して後ちそれが正しいか何うかを吟味すべきものであらう。

これに反して学解は個人によりて思想されても、それ自体は超個人的の意味を有すべきものである。それ故に学解を議するものは、それが正しいか正しくないかを主として、妄りてその学解を為す個人の真理の揣摩臆測を為すべきでない。

私は教界の批評に、余りにその理解のないことを悲しむものである。（了）

注

1　多田はつぎのように言っている。「私が金子氏から宗学上の恩誼を受けてをることは、既に久しい事である。……けれども私は、氏の思想の根本に対しては、実は久しく疑を抱いてをる者である。そのために今日まで幾度も、三河において、十余の同朋と共に、氏の思想について研究をかさね、私自らも直接に氏と論じ合つたことは、一度や二度ではありませぬ」（聞信会編『みどりご』第四巻第一二号、一九二六年一二月、三二四頁）。

2　新聞誌上では、この箇所と「この度」以下の本文のあいだには、一文字下げられポイントが小さくなった文字でつぎの文章が入っている。「大谷大学の問題は金子教授の辞職によつて一応の段落を告げたが、今度の事に当の金子教授の気持はどうであるか、夫れは教授自身の言葉が一番明瞭に語るであらう。即ち氏は左の如く〔中外日報社の〕社員に対して声明された。」

3　この「一」とつぎの「一」に続く段落は、新聞紙上では一文字下げられ、ポイントが小さくなっている。

4　これに相当する『浄土の観念』における金子の表現はつぎのようなものである。「これ〔金銀瑠璃でできたような浄土への不信〕によつて浄土の信仰といふものは今日では殆ど廃れてしまつて、私等の知つて居る相当の識者でありながら今日は極楽往生はい

はないのがよいでは無いかといふ事を云つて居る者が多い。動もすれば今日は浄土といふ事は言はない事が信仰界の常識となつて居ります。之は余程考ふべき事だと自分は思うて居るのですが、信仰といふ者は現実の人生問題である。さういふ様な点から之が一つの常識となりかかつて居るのであります。いずれにしても実在の浄土は信ずる事が出来ないのであります」（一〇四－一〇五頁）。

5 のちに金子は「異安心問題（昭和二年）で、先生に反対したのは、どういう方々だったのでしょう」と問われて、「当時の御講者達ですよ。斎藤唯信、河野法雲、上杉文秀という人達だったんでしょうねえ」と答えている（『曽我量深選集』「月報」5、一九七一年三月、一四頁）。

6 この箇所以下の一段落は新聞紙上では一字下げられ、ポイントが小さくなっている。

7 江戸期の学寮講師、慧然（一六九三－一七六四）を指す。

8 真宗大谷派の僧侶であり大谷大学教授であった斎藤唯信（一八六四－一九五七）を指す。斎藤の名前が圏点にされているのは、彼がのちに述べられる「わが宗門の学頭諸師」として金子の浄土論を否定した人物だと考えられているからである。

9 この一文は新聞紙上では一文字下げられ、ポイントが小さくなっている。

10 『中外日報』に掲載された「金子氏の「浄土の観念」に対する観察」は計八編である。

11 「金子氏の「浄土の観念」に対する観察」(8)

12 『宗教的理性』（丁子屋書店、一九二二年）における「本願選択の意義」「開宗の意義」「真宗の体験」といった論文を指しているのであろう。

13 「金子氏の「浄土の観念」に対する観察」(1)

14 「か」としか読みとれないが、文字の上部が明瞭に印字されていない箇所なので、「が」なのかもしれない。

15 「附言」以下の文章は、新聞紙上では一文字下げられ、ポイントが小さくなっている。

謝　辞

翻刻に際しては、真宗大谷派最賢寺住職の金子正美氏と中外日報社から記事（論文）翻刻の了承をいただきました。心より御礼を申し上げます。